論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　日本語と中国語の動詞句に関する対照研究
—概念構成における語彙化と構造化を中心に—

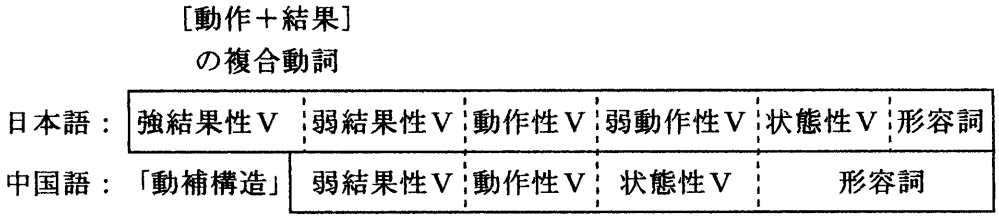
氏　名　黄 淑妙

本稿はテ形補助動詞による拡張までを範囲として、単純動詞、複合動詞（中国語では動補構造）、そして動詞の文法化を中心に、対照研究の立場から、日本語と中国語における動詞句の語彙化および構造化について比較・検討し、両言語における特徴を明らかにするものである。

本稿は7章から成り、第1章では複合動詞・動補構造を中心とした先行研究を取り上げ、第2章では日本語の述語文の構造について概観し、述語文における動詞句の位置づけを行った。第3章では、日本語と中国語における単純動詞の意味構造を分析したうえで、複合動詞および動補構造における組み合わせおよび制約について仮説を提出し、かつその仮説の検証を行った。第4章では、日本語の語彙的複合動詞・統語的複合動詞として兼用できる後項動詞およびテ形補助動詞を中心とする日本語の動詞句における文法化について論じた。第5章では、中国語の動補構造における文法化について考察した。さらに、第6章では翻訳と誤用例から見た日中両語における表現構造の相違について比較・検

討した。最後は上述の6章のまとめとして、結論を述べた。各章の考察により、日本語と中国語の動詞句に関して、主に以下のことが明らかになった。

まず第1に、単純動詞について、日本語の単純動詞には強・弱結果性、強・弱動作性、状態性という連続の意味範疇が存在しているが、中国語の単純動詞には強結果性という意味のカテゴリーが存在せず、〈弱結果性〉と〈動作性〉という二つのカテゴリーを除き、中国語と日本語における動詞のカテゴリーは互いに一致せず、中国語で特に結果性を明確に表現するためには[動詞＋結果補語]という別の形式で表される。一方、日本語は結果性弱に当たる動詞および動作性動詞は複合動詞を取る形で結果性を高めることができる。日本語と中国語における動詞の意味カテゴリーの対応関係は次のようになる。



第2に、日本語の複合動詞の中には、影山の「他動性調和の原則」では説明できない「煮崩れる」、「煮こぼれる」、「焼き重なる」、「折り重なる」などの複合動詞が実際に存在していることをきっかけに、複合動詞として表出される意味範囲の側面から、複合動詞の仕組みを考え直し、「動作性動詞複合または修飾原則」および「結果性または限界性補足原則」の2つの仮説を提出した。

仮説を検証するため、まず、各カテゴリーに属する動詞を組み合わせてテストを行い、その結果、下記のような組み合わせが得られた。

*結果性＋結果性、*結果性＋動作性、*結果性＋状態性、
動作性＋動作性、 動作性＋結果性、 動作性＋状態性、
状態性＋状態性、 状態性＋動作性、*状態性＋結果性

また、この組み合わせに照らして、既存の複合動詞を検証してみた。以上の二つの側面から検証した結果、二つの仮説を下記(1)のように修正した。

(1) 日本語の複合動詞の意味的な結合原則

I 動作性（弱）動詞複合または修飾原則

複合動詞全体は一つの複合した動作概念の事象を表す。ただし、V1とV2の組み合わせに次のような制約がある。

a. 動作性動詞複合の場合、類似した概念の動作性動詞同士が結合しやすい。〈連続動作〉、〈弱—強動作〉、〈(様態＋動作)—限界〉の意味を表す。

b. 動作性動詞を修飾する場合、〈様態—動作〉や〈動作—様態〉の意味を表し、V1がV2またはV2がV1を修飾する。

II 結果性または限界性補足原則

動作を表す単純動詞に[＋結果性][＋限界性]の意味を表す動詞を付け加え、複合動詞全体は一つの[＋結果性]あるいは[＋限界性]の事象を表す。〈動作—結果〉、〈過程—結果〉、〈動作—限界〉の意味を表す。

他方、中国語の動補構造の意味的な結合原則は、〈動作—過分〉を表す例も多くはないが存在し、また、程度補語を用いて表される事象は〈状態—程度〉を表しているが、主として、(2)a.「結果性または限界性補足原則」に従うと結論づけた。中国語の動補構造に適用する意味的な結合原則は(2)のようにまとめられる。

(2) 中国語の動補構造の意味的な結合原則

a. 結果性または限界性補足原則

動作を表す単純動詞に[＋結果性][＋限界性]の意味を表す補語を付

け加え、動補構造全体は一つの[＋結果性]あるいは[＋限界性]の事象を表す。〈動作―結果〉、〈動作―限界〉の意味を表す。

b. 前項述語を修飾する原則

動作性動詞を修飾する場合は〈動作―過分〉、程度補語の場合は〈状態―程度〉の意味を表す。

なお、日本語の〈自他同形動詞〉が複合動詞に組み込まれると、A視点かP視点かのどちらかになり、視点は一貫しているのに対して、中国語には数多くの〈自他同形〉動補構造が存在していることから分かるように、中国語の動補構造にはA・P視点が存在しており、視点の転換が可能である。中国語の動詞句と比べてみると、日本語の複合動詞に厳密な制約があることは、日本語に中国語のようなA・P視点が存在していないことに起因すると主張した。

第3に、日本語の動詞句における文法化について、後項動詞における語彙的複合動詞から統語的複合動詞への文法化の傾向は、総合的に(A)で包括することができる。

(A)　「〈空間〉→〈非具体的空間〉⇒〈時間〉→〈状態〉」

語彙的複合動詞から統語的複合動詞への文法化は、統語的特徴である格助詞の逸脱または変化、V1における結果性および動作性の弱化と、意味的特徴である意味の漂白化（semantic bleaching）との間に、相即性が見られる。

一方、本動詞から補助動詞への文法化の傾向は、(B)でまとめることができる。

(B)　本動詞から補助動詞への文法化の傾向

a. 同じ領域から同じ領域へ拡張する
b. 類似性のある領域へ拡張する
c. 〈非具体的空間〉⇒〈時間〉

「本動詞⇒補助動詞」の文法化は、音韻および形態的には語形の縮約（contraction）、意味的には意味の漂白化、そして、統語的には格標識の脱落や転移および統語的な要素の挿入がより制限される（第 4 章 2.2.参照）などの現象に照応している。

第 4 に、中国語の動補構造における補語および複合方向補語の文法化の傾向は、総合的に(C)で包括することができる。

(C)　中国語の補語における文法化の傾向

a.　「〈空間移動〉⇒〈時間〉→〈状態〉」（「～到」に限る）

b.　「〈空間移動〉⇒〈空間〉→〈非具体的空間〉→〈時間〉→〈状態〉」

上記(C)b.に見るような中国語の補語における文法化の傾向と日本語の動詞句における文法化の傾向(A)とは、拡張の傾向においては一致しているが、〈語彙的形式⇒統語的形式〉の転換点においては興味あるずれが観察される。中国語の動補構造においては、〈空間〉次元における意味拡張が始まると同時に統語的形式への切り換えが起こるが、日本語の動詞句においては、〈時間〉の次元に拡張された段階で統語的形式への転換が生じるという差異が見られるのである。